

5 （ナレーター）皆さん、いかがお過ごしですか。福岡市がお送りする「こころのオルゴール」の時間です。今日は私、岡澤アキラがお届けします。

今回は、国際協力学生団体「F I W C九州」の活動を通して、ハンセン病と出会った大学3年生のお話です。

10 【女子大生役】「F I W C九州」は、福岡の学生が主体となり、ワークキャンプという形で国内外の様々な社会問題に取り組んでいます。

15 私は大学1年生から活動を始めましたが、それまで「ハンセン病」という病名すら知りませんでした。

最初に訪問したのは、ハンセン病が治った人たちが暮らす、中国のハンセン病快復村です。出発前に母親から、「大丈夫？ うつらない？」と聞かれました。

20 事前にハンセン病のことをみんなで調べて、正しい知識を身につけていたので、「ハンセン病は治る病気で、感染力は非常に弱く、遺伝することもないんだよ。」と説明することができました。母親でさえ、誤った知識を持っていたことに驚きました。

その後、鹿児島県にある国立療養所「星塚敬愛園」を訪問しました。そこで出会った快復者のおじいちゃんは、ハンセン病の後遺症で手の指が変形し、右足は義足です。初めて会った途端、挨拶代わりのように、「怖くないか」と聞いてきました。ドキッとしましたが、「怖くないよ」と答えると、「そうか」と笑ってくれました。

おじいちゃんは明るくて気さくな人です。しかし、家族から強制的に引き離され、隔離されてきました。周囲の人々の誤った知識や偏見のために差別され、ずっと辛い思いをしてきたのです。

施設での暮らしや趣味など、おじいちゃんといろいろなことを話し、一人の人としておじいちゃんのこと大好きになりました。身近な母親でさえそうだったように、世間の人はハンセン病への偏見や誤解を持っています。それをなくすために、私に何ができるだろうかと考えるようになったのです。

私は、自分の体験をSNSで発信したり、FIWC関東が主催しているハンセン病勉強会に参加したりして、活動の輪を広げていくつもりです。